

フェンケル作戦を記念して

1990年2月10日

ワルシャワ条約軍が3ヶ月を想定していた電撃攻撃、包囲網、掃討作戦からなる計画への抵抗は、144ヶ月に延びた

Bruno

2022年2月10日



はじめに

「フェンケル」とはティグリーニャ語で、何かを、特に石を地面から引き抜く過程を表す言葉である。

ワルシャワ条約機構軍の戦略は、アスマラ、マッサワ、アッサブ、オムハジェル、メレブ、ツェロナ、ザレンベッサ、紅海のダフラク島といったエリトリアの主要な入港地に高度に機械化された海空戦力を含む 25 万人以上の新たな武装兵士団を集結させた後、「アフリカの角」地域における軍事戦略上の要衝と経済圏の確保を主目的として 1978 年に展開された。

この軍事行動は、エリトリア人民解放軍（EPLA）を 3 カ月で壊滅させることを目標に、現地での実行を想定して綿密に組み立てられた軍事展開計画から立案され、1) 電撃戦、2) 包囲戦、3) 分散した残存兵力の掃討作戦から構成されていた。

エリトリア人民解放軍（EPLA）は、マッサワ港の一部と首都アスマラを除くエリトリア全域を完全に掌握していたが、両地はこの時期にはまだ敵軍の手中にあり、激しい戦闘が繰り広げられていた。

この軍事キャンペーンは左翼的なレトリック、プロパガンダ、武力誇示のための軍事パレードに満ち、ワルシャワ条約機構の身勝手な経済的、安全保障的利益に基づいていた。安全保障上の利益と計画は、エリトリア、エチオピア、ソマリア、その他の国、そしてアフリカの角地域の人々の独立と主権に関するあらゆる懸念よりも優先された。



背景

1972年のはじめに、ワルシャワ条約機構の新しい政治方式が策定され、「アフリカの角」地域にその種が蒔かれた。ハイレセラシエの支配に対する軍事クーデターを組織するために、Senay Likke 博士が当時の軍事エリートたちと緊密な関係を取りながらエチオピアの政治状況を整えていたとき、のちに(1975年に)議長の任に就くことになる Mengistu Hailemariam 大佐は、トロイの木馬として巧みに利用された士官であった。Senay 博士は、1972年以来、エチオピアで全力を尽くしこのプロジェクトに深く関わってきた。彼は封建的なエチオピアと地域に社会主義的変革をもたらすために、明確な軍事クーデターという選択肢を使う、当時の言い方では「非資本主義的な発展の道」を信じて推進した重要人物であった。これは当時、ワルシャワ陣営によってエチオピアのみならずすべての発展途上国に対して広く指示されたコンセプトだった。

西側諸国寄りであったエチオピア軍事政権の議長 Aman Andom 将軍は、1974年11月、エリトリア問題の政治的解決を迫ったために惨殺された。Tafari Benti 准将, Getachew Nadew 将軍, Sissay Habte 少佐, そして彼らの方針を継ぐ多くの人々による同様の試みも、1975年と1976年に残忍なやり方で打ち碎かれた。

エチオピアの支配政党である労働者党、その他の勢力的には劣る派閥グループが台頭し、Ashagre Yigletu 博士と Emanuel Ghebreyesus が主導するエチオピアナショナリティ研究所が設立された。前者はユーゴスラビアのベオグラードで教育を受けたエチオピア人であり、後者は1960年代にアディスアベバ大学の過激派グループに属していたエリトリア系エチオピア人であった。こういった現場での綿密な準備により、この時期に地域自治は政治的な選択肢として、またエリトリア問題の解決策としてもはやされたのだ。

1972年以降のエチオピア軍事政権の主要な立案者にしてイデオログであり、「ラザ・プロジェクト」と呼ばれる4万人規模の農民軍の創設者である Senay Likke 博士も1977年2月に宮廷での反乱で殺害された。この事件に反応して、エチオピア軍事政権議長である Mengistu Hailemariam 大佐によって「赤色テロル」がエチオピアとエリトリアにおける時代の趨勢として公式に宣言されたのだ。その後、エリトリアとエチオピア全土で平和を愛する何千人もの若者たちが無残に殺害された。Mengistu は聖人となり、エリトリアとエチオピアの若者は罪人となった。

EPLA は先手を打って前述の「ラザ・プロジェクト」を打ち碎いた。しかし Mengistu と Senay Likke 博士や Negede Gobeze 博士のような主だった共犯者たちは権力を維持し、エリトリアとエチオピアの抵抗勢力に「帝国主義とアラブのオイルマネーの手先」というレッテル貼りをすることによって、飢饉に苦しむエチオピアの人々をワルシャワ条約機構側の戦争キャンペーンに引きずり込み続けた。

急速な戦力配備

1941年から1974年まで、過去の軍事作戦の中心となったのは、米国、英国、フランス、イスラエル、イタリアを中心とする NATO からの軍事・外交援助に大きく依存したエチオピア帝国政府であった。しかし、軍隊に新しい武器、ノウハウ、技術を導入するため、1977年にエチオピア軍事政権がホワイトハウスからクレムリンに同盟関係を変更したことにより、ワルシャワ条約機構加盟国が容易に関与できる迅速な戦力配置計画が必要となった。

その時期に、すなわち 1977 年に、この流れが進む中で、ユーゴスラビア、トルコ、ソ連、キューバ、南イエメン、東ドイツ、北朝鮮の軍隊が迅速にそして容易にその空白を埋めることになった。軍隊の迅速な配備は時代の趨勢となった。イタリアとフランスの共産党と社会党も、この時期、進行役として重要な役割を果たし、必要とされる協力関係を築き上げた。そのため、中東、カリブ海、東欧から東アフリカへの急速な戦力配置は、アフリカの歴史上かつてない規模で、数週間から数カ月で実行に移されたのだ。

また、多くのエチオピア軍人だけでなく新兵までも、さまざまな（共産主義への）教化や軍事訓練プログラムのために、国内外を問わずさまざまな分野で派遣された。エチオピアの貧しい農民も、「すべてを前線に捧げよ」というスローガンのもと、数多く徴兵された。エチオピアに蔓延していた飢饉は軍事的な目的のために広範囲にわたって利用されたのだ。

統治政策の徹底

東ドイツの行政制度は、現地では「ケベレ」と名付けられ、アフリカの角地域を統制するために広く導入され、遠隔の村、町、大都市において確立された。この表向きは寛容な制度の突然の導入は、地域にとって、とりわけエリトリアとエチオピアの脆弱な社会経済状況にとって、地を揺るがすような影響を及ぼした。

エリトリア人民解放軍（EPLA）封じ込めのための精緻な駆け引きを満載したワルシャワ条約機構の多角的な外交戦略が、ベルリン、バイルート、ダマスカス、バグダッド、アデン、そしてヨーロッパのさまざまな首都で、1978年に公然と繰り広げられたのである。

アフリカの角地域の政治活動のいたるところで、公然非公然を問わず諜報活動がはびこった。専門的な技術を粘り強く駆使し、エチオピア・エリトリア国内の抵抗運動の中の古い亀裂を広げ、新しい亀裂を産み出した。

この時期のエリトリアの政治家との相互接触も、同時にあちこちで強まった。エリトリア解放戦線（ELF）はこの過程で、バクー市（ソ連）、ダマスカス（シリア）、ハルツーム（スーダン）などの場所で開かれた会議を通じて、服従すべく説得された。EPLA と ELF の両勢力を統一戦線に結集させ、力を合わせて切迫した危機に立ち向かおうとした内部の努力や試みは、このようなよこしまな活動によってまんまと頓挫させられたのだ。

地政学的政策が、「自己統治」、あるいは彼らの当時の言い方であった「地域自治」に基づく新しい政治的駆け引きを持ち込むことによって、エリトリアを含むアフリカの角の宗教的・民族的な弱点を拡大するプロセスを、荒削りな形ながらも始めたのである。

アフリカの角で過去に用いられた植民地の分割統治というゲームは、人民のための社会正義という新しいラベルを貼られ、巧みに新しい瓶に入れられたのである。この地域で、この新しい政治的解決の方式に惚れ込んだ政治家は少なくなかった。エリトリアでは、党派リーダーの数が増え、その結果に自信を得たエチオピア軍事政権は、この政治的解決の選択肢をさらに、「コラマ」（低地住民）と「デガマ」（高地住民）の分断のために用いた。この歴史的な時期に、アフリカの角、ナイル川流域、パレスチナやシリアの指導者を含むこの地域のさまざまな利害関係者によって行われたエリトリア問題に関するさまざまな会議も、このような結果へと向かう活動を促進したことは目にも明らかだ。

東ドイツ（ベルリン）のエーリッヒ・ホーネッカーとソ連（モスクワ）のレオニード・ブレジネフは、1977 年末から 1978 年初めにかけて、エリトリア、エチオピア、ソマリアの政治指導者と一連の会議を行ったが、エリトリアとソマリアの政治的降伏という彼らにとっての喫緊の必要課題を達成するには至らなかった。だからといって、すべての要素を考慮するなら、それらの会議がエリトリアの政治情勢に与えた影響は決して無視できるものではなかった。戦地での第五列（敵に同調する者）の活動が強化され、1980 年のエリトリア解放戦線(ELF)の決定的で自滅的な消滅につながった。

エチオピア人ジャーナリストの Bealu Girma は、目の前で繰り広げられたこの驚異的な歴史のドラマを、著書『オロメイ（帰らず）』で表現しようと試みた。至近距離から得られた知識と観察を基にした彼の巧みな目撃ルポルタージュを抜きにしてこの時代のイメージを読者に伝えるならば誤解を招くであろう。

1978 年 10 月 22 日、EPLF の中央委員会は、その条件、優先順位と地域的現実を鑑み、この軍事的猛攻撃に立ち向かうための新しい戦略を決定した。EPLA が利用できるすべての選択肢を慎重に審議・評価した後、この歴史的会議で、選ばれた山岳地帯、つまりヌビア楯状地、あるいはエリトリアの自由戦士によってサヘル山脈と一般に呼ばれる山地において上述のように展開するワルシャワ側の戦

争戦略に立ち向かうことが決定されたのである。指導部はまた、差し迫った挑戦に直面するための新しい軍事、安全保障、外交、政治、経済、社会の体制と準備に向けてロードマップを承認した。また、政治的、外交的、現地の社会的現実を踏まえて、ワルシャワ側の軍事行動に対応すべく人的資源の配分を行った。

この歴史的な動きは、歴史の節目にエリトリアを取り巻く外交・軍事の現状に対するきわめて現実的な評価に基づいて行われたのだが、ワルシャワ条約機構の将軍たちは EPLA が先手を打って戦略的な軍事的行動をとることに驚かされた。しかし、残念なことに、これらの将軍がようやく現実を直視するようになったのは、彼らが行った 10 年のうちに行った 7 回以上の主要な軍事的試みと攻勢が完全に壊滅的な失敗に終わった後であった。1983 年まで複数の戦線で、すべての軍事的攻撃目標を壊滅した 7 回の電撃戦を含むさまざまな戦闘で、22 万 3870 人以上のエチオピア兵が EPLA によって行動不能にさせられた。戦闘は 1983 年まで、さまざまな前線で 7 回に及んだ。EPLA は、自ら選んだ戦略的軍事作戦によって敵を打ち負かすことに成功しただけでなく、作成の展開過程で武装解除し、捕獲し、巧みに改修された武器や軍事資源を慎重に活用した。「敵軍から奪った銃と弾丸をもって、敵と対峙せよ」というのが、すべての実戦において EPLA の重要なモットーであった。

1983 年、エチオピア軍事政権は、安全保障責任者の Tesefai Weldeslassie 大佐が主導する秘密会議に EPLF を招待し、彼のチームは、Alemu Abebe 博士、Shiwandagn Bekele 博士、Ashagre Yigletu 博士、官僚とセキュリティスタッフで構成されていた。軍事政権が崩壊する兆しは、この会談の間であらわになった。交渉団のメンバーは、所属する派閥や党派によって、何度も対立した。会議の結論で最後にはっきりしたのは、南イエメンの Ali Nasir Muhammad 大統領と北朝鮮が政権を救おうとする最後の試みを図ろうとしていることであった。Ali Nasir 大統領は、もろもろの懸念のうちでもとりわけ、将来起こる南イエメンでの権力闘争、南イエメン内政に対するエリトリア側の見方、地域的安定について懸念していることは明らかだった。南イエメンと北朝鮮の軍隊は大軍であり、機械化され、EPLA に対するワルシャワ陣営の軍事行動において、海空戦力の供給源であった。この戦争期間中の Mengistu に対するクーデターは失敗したが、エチオピア軍政の内部体制の亀裂は見た目に見えて大きくなっていった。

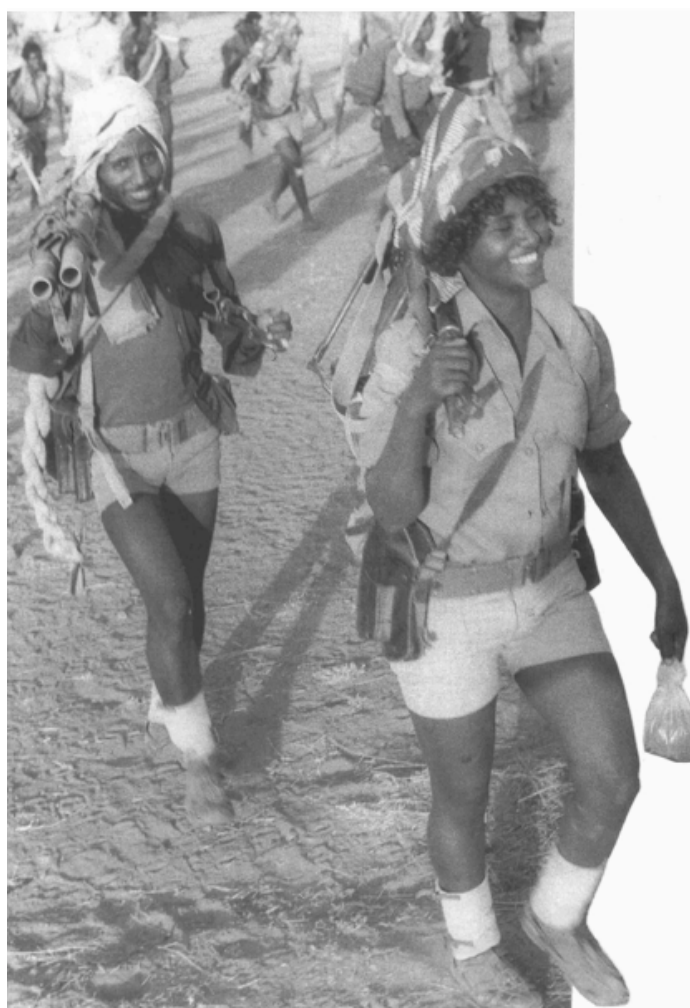
フェンケル作戦

エリトリア国民の古い伝統である一般兵士たちが木陰で行う継続的かつ分け隔てのない民主的対話、効率的な意思疎通、物流、輸送が EPLA の機動性を成功させた鍵であり、それなしにはワルシャワ条約軍機構軍と戦う際の方程式は取り組むことのできない謎のままであり続けただろう。化学兵器を使用される脅威への備えは EPLA にとって別の困難な課題であり続けたが、手術室と救命士を戦場の近

くに配置したのは成功だった。

針は大砲のように、ナイフは鍬のように、平らな石はオープンのように、壕は家のように丁寧に扱い、トカゲや蛇には人間の体を休めるためにどこかに行ってくれと謙虚に頼み、多忙な夜間に敵を不必要に警戒させないため、足が音を立てないように手ずから仕立て直したぴったりとしたズボンを履くことで、自由を求めて戦う戦士たちの不屈の兄弟愛と高い士気が形作られたのだ。

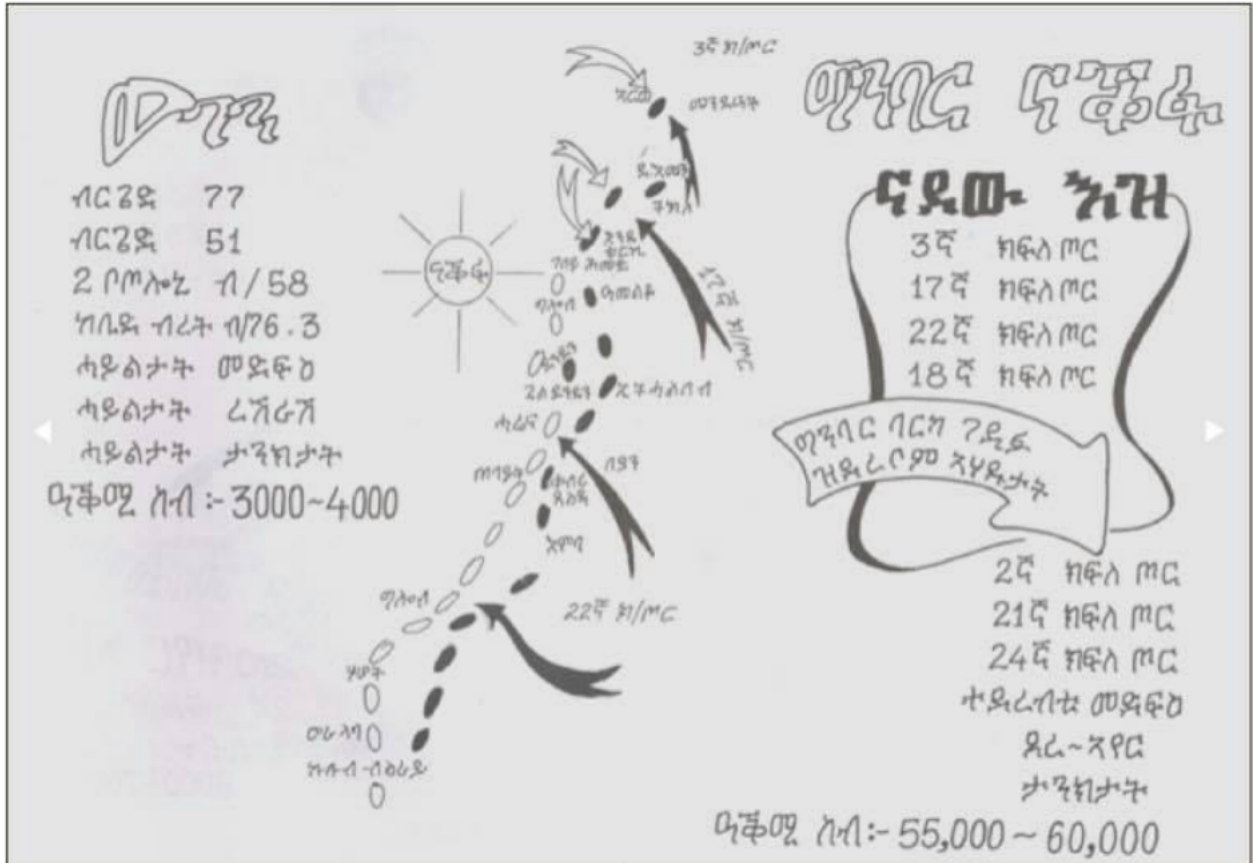
当時、ボブ・マーリーとツェハイトゥ・ベラキの音楽が、エリトリアの自由を愛する世代があらゆる困難を乗り越えて住む高い山々や深い谷に広がる塹壕で反響しつつ調和して聞こえてくることも珍しくなかった。



1988年8月、サヘル山脈とその周辺の山脈と谷で行われた10年にわたる英雄的で長引く防衛的消耗戦の後、EPLAはアフアベットの町を囲む主要戦線を占拠する決定的な戦略的攻勢をかけたのである。この歴史的な戦いの成功には、攻勢に先立つ周到な準備が大きく寄与していた。アフアベットは、戦争の主導者たち、つまりワルシャワ条約機構とその同盟国の司令部が10年にわたり駐在した戦略的に重要な町である。サヘル山脈の南に位置し、農業がさかんで資源に恵まれた西部とエリトリア東部低

地との交易路の役割を果たす町である。

EPLA のベテラン陸軍司令官である Wuchu は、この戦闘を「期限を定めない葬式への招待状」と呼ぶことで、攻勢の開始を指揮下の師団の兵士たちに伝えた。この戦闘を目撃したイギリスの歴史家バジル・デイビッドソンも「第二のディエン・ビエンフー」と名付けた。両者とも、この歴史的な先制攻撃の成功が、アフリカの角の軍事的展望の重大性を、きっぱりと変えるものであるとの発言と評価で一致している。



この戦いは、EPLA が自らの機械化された熟練の歩兵隊、海軍の統合された火力、長年の戦争で蓄積された経験を活用するための新たな勢いと貴重な機会を先んじて示し、新たに道を開いたものである。これらの戦闘の境界線の外側に広く展開した精鋭特殊部隊の能力を含め、過去に蓄積されたすべての教訓は、この歴史的な戦闘に決定的な勝利をおさめるための道具として、効果的かつ革新的に使用された。



この攻勢は、エリトリア在住の人々や海外からこぞって歓迎され、支持された。地元エチオピアの陸軍、海軍、空軍は反乱を起こしたが、残念ながら戦場や都市部で容赦なく打ち負かされた。

1989年、EPLAは残存する重武装の敵に戦いを挑んだ。紅海沿岸と隣接する島々を効果的かつ完全に支配するために、沿岸の低地に陣地を広げ続けた。ソ連の支援を受けたエチオピア軍への補給線であるマッサワースマラーアディスアベバの道路回廊は、EPLAの手に落ちた。敵軍によるこの地の奪還の試みはすべて、あからさまに頓挫した。

1990年、マッサワ港とダフラク（ナクラ）にあったソ連の弾道ミサイル搭載潜水艦基地を陸海空から守る、約70～80キロに及ぶ完全武装した敵の集中防衛線も、再び英雄たちが描かれる絵となった。つまり、マッサワ港は解放されたのだ。

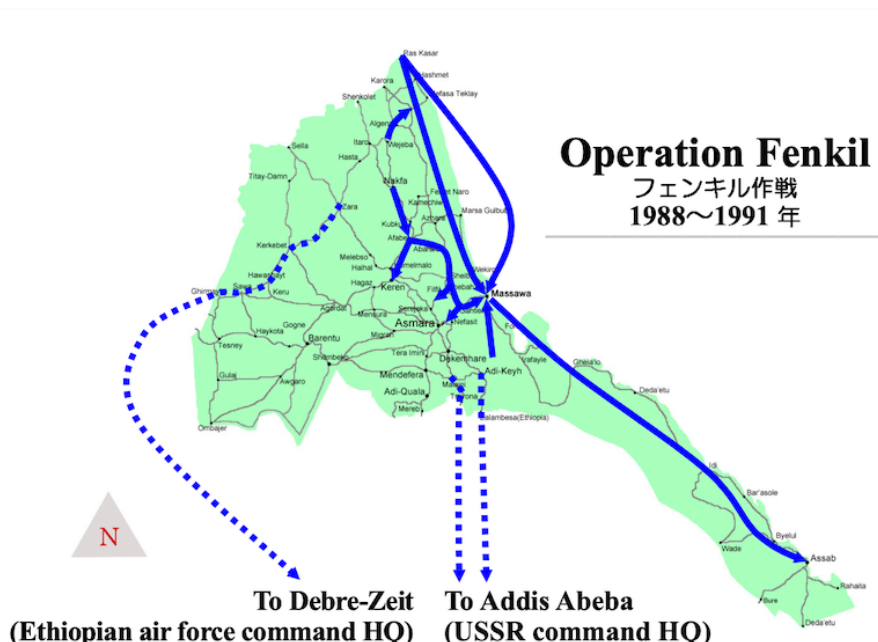
フェンケル作戦とその波及的影響は、東アフリカを巻き込んだ。ホワイトハウスとクレムリンの間のホットラインが稼動するようになった。超大国の外交的圧力は強まった。解放されたマッサワ港とその周辺にはスカッドミサイルが何日も雨のように降り注いだ。このときのミサイル射出は紅海のはるか沖に停泊するソ連軍艦からだけだった。男女両方の戦士で構成されたEPLAは不屈の精神で立ち向かい、マッサワ（「紅海の真珠」）を自由の中心地とした。戦闘部隊の30%は女性だった。

この重要な時期に、この地域の政治に新しい現象が表面化し始めた。アフリカの角をめぐる各国の地政学的政策で、旧来の潜伏工作員、新しい工作員が目立つようになったのである。TPLF と米国で訓練を受けたエチオピア人の元エリート兵士は、政策の結果生じた権力の空白地帯を埋めるために関連性のある勢力を集め始めた。この新しい外交政策に沿った政治的有力者は、この地域で力をつけた。米国は、EPLF をエチオピア軍事政権との一連の公開和平交渉に招き、スーダンをはじめとする地域の安全保障当事国も参加するようになった。

EPRP, OLF, その他の抵抗運動を同じプラットフォームにまとめようとしたすべての試みは、TPLF の戦略的優先事項によって頓挫した。地域平和には不可欠である対話を閉ざすために、TPLF は、EPRP の指導者 Tsegaye Gebremedhin とその同士を 1989 年にメケレで殺害した。

エチオピアとアディスアベバでは、短期間ではあったが抵抗勢力の再生が優勢になった。エチオピアの国土で戦闘を終結させる必要があることは明らかだった。

これを目標に、北部から側面攻撃をする EPLF の行軍距離は、マッサワ港まで約 1200 キロに及んでいたが、アサブ（エリトリア南部の港町）、アディスアベバ（エチオピアの首都）の司令部を目標に長征を開始した。西からは、マッサワ港から約 1500 キロに及ぶ行軍が、デブレゼイト（エチオピアの主要空軍）の司令部を目標に長征を開始した。



EPLA は、東アフリカ全体をキャンバスに、英雄たちの絵を描き、歴史と、この地域の兄弟的な人々の間に、連帯と協力という新たなマイルストーンを刻み込んだのである。1993 年、「フェンケル作戦」

によって、東アフリカのテロリズムの銃はその音をひそめた。ついに、エリトリアとエチオピアの人たちは解放されたのだ。

この時代の楽観論的な歴史や熱狂的なイメージを読者に残すことは、誤解を招きかねない。理不尽な騒乱、強制移民、貧困、低開発、そして、アフリカ大陸の歴史上類を見ないこの野蛮な戦争で、エリトリアを守るために尊い命を捧げた6万人以上の英雄やヒロイン、身体的・精神的に障害を負った数千人の痛ましい傷跡を残しつつ、不平等に抵抗する険しく困難な道のりをくぐり抜け、エリトリアは教訓を手にしたのである。

フェンケル作戦は、あらゆる人種、性別、信条の先見者たちを含む人々による、真実への思いと集団的意思表明の献身的かつ継続的な運動の高まりであり、毎年2月10日に「紅海の真珠」と呼ばれるエリトリアのマッサワ港で大いなる敬意をもって記念されている。

